

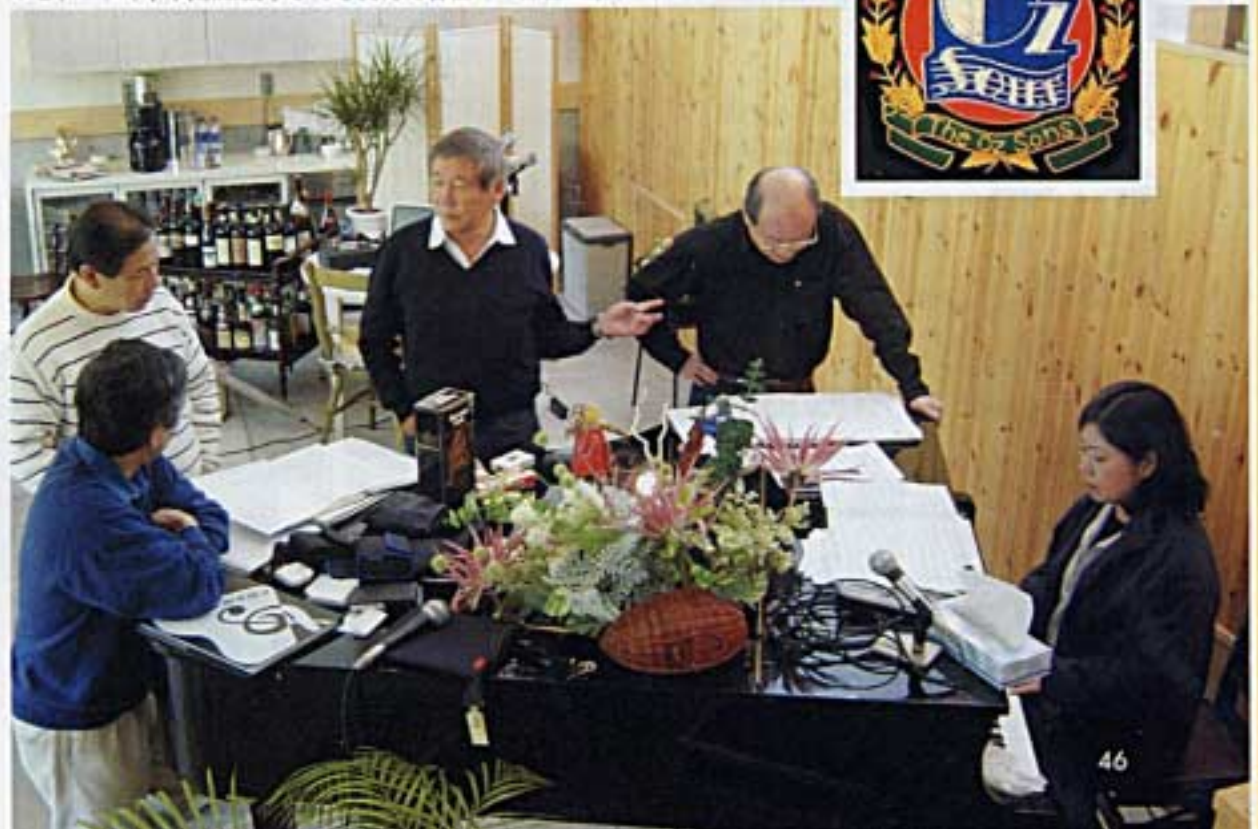


坂田敏夫氏(左)のコンサートで。左から2人目若山邦弘さん、清田滋さん、小島惇さん、栗本滋雄さん

オージー サンズ ジャズの調べに夢をのせて The Oz Sons

▶オージーサンズ唯一の「お揃いの衣装」であるエンブレム。「オーダーメイドで作りました。色々なところから見積もりをとって、山口県まで注文したんですよ」と、僥倖家の一面も

▼ピアニスト、大原江里子さんを交えた合宿での練習風景(軽井沢)



男性四人のジャズ・コーラスグループ、
The Oz Soundは「ジャズ・コーラス好きで
ヴィンテージ・ワインのような年齢のオジ
サン四人が集まって道楽にスタンダード・
ジャズを歌っています」と、そのホームベ
ージに自らを紹介する。

メンバーに音大などの出身者は一人もい
ないが、現在も、全員が会社員や大学教授と
して現役で働きながら、高いクオリティ
を持つグループとして活動している。

この日は仙台に転勤中の清田滋さんの上
京に合わせた練習日。マイクを使ってピア
ノに合わせて練習するために、ピアノや歌
の生演奏が聴ける神楽坂「もりのいえ」に
集まった。店の営業が始まったばかりの、
客足のまばらな時間を利用しての練習だ。

「グループ名はなんと呼んだらいいです
か?」とうかがうと、「正確にはオジーサ
ンズですが、みんな呼びたいように呼びま
すよ。オジーサンズとか、大爺さんズとか」。
メンバーの年齢の合計は二三五歳と七カ
月。お互いを「若G」「まこG」などと呼び
合う。実際に若山邦敏さん、栗本滋雄さん

にはお孫さんがいて、名実共に「オジーサ
ンズ」なのだそうだ。

「今からでも何かできるのでは…」

オジーサンズの前身となる名無しのコ
ーラスグループが結成されたのは一九九〇
年のことだ。リーダー、小島恂（とむら）さんの亡父、
小島正雄さんはタークダックス、スリーグ
レイセスや、ポニージャックスなどを育て
た音楽家。そのため小島さんは幼い頃から
コーラスの音色を身近に育ってきた。

「音楽に近い環境にはあるが、音楽は聴く
ものであって、自分が演奏しようとは思っ
ていなかった」という小島さんの気持ち
動かしたのが、一九九〇年末に行われた、
日本のポップスコーラスの草分け、スリー
グレイセスの復帰コンサートでの言葉だ。
「私たちも子育てから手が離れ、中にはお
ぼあちゃんになった人もいて、第二の人生
をどうしようかと考えたときに、(私たちに
は)コーラスしかないのです、また楽しみなが
ら始めました」。

「この言葉を聞いて、つくづく羨ましく思
ったんです」と小島さん。それまで人前で
歌うことなど考えたこともなかったが、二
〜三曲ならなんとか格好がつくのではない
か、と、その日のうちに色々な人に相談し、
コーラス好きのメンバーを集めてさっそく
練習を始めた。

初めての練習が一九九一年の湾岸戦争勃
発の日。数回のメンバーチェンジを繰り返
し、現在のメンバーにほぼ固まったのは、
二〇〇一年、商社に勤めていた栗本さんが
台北赴任からもどつてからのことである。
それまでも、小島さんが沖縄に、清田さん
が北海道に転勤になるなどの現役会社員グ
ループらしいハブニングはあったが、歌う
機会があるときには、コーラスパートを把
握している、以前のメンバーに求めてもら
うなどして、乗りきってきた。

通常の練習場所は、音楽スタジオを借り
たり、デジタル音響・録音の設備を備えた
若山さんの自宅居間であったりする。曲を
四声にアレンジすると、歌唱の指導はビ
アニストの大原江里子さん。この日、オー



若山邦紘さん



清田滋さん



小島慎さん



栗本滋雄さん

ジーサンズが集まったお店のオーナーの義姉でもある。

練習時には学生時代からのコーラス経験を持つ、若山さん、栗本さんがリーダーシップをとる。一曲が仕上がるのにかかる期間は、およそではあるが二〜三時間の練習を三、四回。常時一五〜一六曲をレパートリーとして、歌えるように練習しているそう。こうした自宅練習、お店での練習のほかにも、海外や国内の有名コーラスグループのライブには誘い合って精力的に出かけ、刺激を受けて帰ってくるという。

また、オージーサンズの誠実な音色は、多くのプロにも認められており、これまでもスリーグレイセスや、笈田敏夫、世良譲、鈴木史子などの大舞台にゲスト出演を果たしてきた。

「私たちの実力、というよりもご縁があった、大舞台にのせていただいているというのが実態です」と若山さんは謙遜する。

ご家族は応援してくれていますか？と聞く。「反対はされないけど、勝手にやっちなさいというかんじ」（小島さん、栗本さん）。

「最初にスリーグレイセスと共演したときには見に来てくれました」（清田さん）。「全面的に応援してくれます！」（若山さん）。

温かい歌声

マイクを使った練習が始まる。

“Candy I call my sugar candy……”

オージーサンズが歌い始めると、それまでおしゃべりをしていた人たちが、いきなりのゲストの演奏に聴き惚れた。決して大きい声ではないのに、ざわついている人を静かにさせる力をもった歌声だ。何より、楽しそうにニコニコと丁寧に歌う。

「こっちまで元気が出た、と言ってくれる人がよくいます。修業しているわけでもないですから、自分たちが楽しめないと、ほくたちの歌が壊れてしまう気がします」と清田さん。

「定年退職後、このメンバーでプロになる気はありますか？」と聞くと全員が口を揃えて「毛頭ない」と答える。

だが、オージーサンズの演奏には「素人

聴く読書 朗読CD

◎カセットもあります◎



1,785円

ことばがゆっくりりじんわりと
伝わります。
日本語のリズム、
ことばの美しさが味わえます。
目読より時間がかかる分、
想像がふくらみます。
声は、語り手の体温と
作品の深さを伝えてくれます。

まずは資料請求を!



作家例

池波正太郎	藤沢 周平
平岩 弓枝	乙川優三郎
金子みすゞ	志村ふくみ
伊集院 静	立原 正秋
辻 仁成	藤原 伊織

◎目録お送りします

0120-463317

<http://www.5a.biglobe.ne.jp/~yrt/>

〒231-0025 横浜市中区松影町1-3-7

TEL: 045-680-1767

FAX: 045-680-1888

横浜録音図書株式会社

だから少しくらい下手でもあたりまえ」と
いう安易さはない。

「アマチュアだからといって、いい加減な
演奏はできません。誰でも。どうせまずい
料理。なんていうのは食べたくないのと一
緒で、まずい。コーラスなんて聴きたくな
いでしよう。

ぼくらはプロではないけれど、自分たち
を「アマチュアコーラス」とは紹介したく
ない。そのかわり、一歩ずつでもアマチュ
アという甘えから脱するように頑張ってい
ますよ」と若山さんは語る。

「僕らの音楽を聴いて、いいな、と思って
くれる人がいるということが一番の喜びな
ことばがゆっくりりじんわりと
伝わります。

ので、出演料はもらわずに、お声がかかっ
たところにボランティアで出かけます」と

いうオージーサンズ、たまに「お車代」が
出たときなどは、貯金しておいて、オージ
ーサンズとしてのおつきあいにかかる費用
に充てるそう。その内訳は、多くが慶弔費、
「残念ながら御香典になることが多いのは
年代のせいですかね」。

自分たちらしい魅力を

「若い人で力いっぱい大きな声で歌う人が
います。それはそれで魅力がありますが、
僕らにそれはできない。だから違うことで

アビールできるといい」というオージーサ
ンズ。全員が力まずに、リラククスして、
伴奏と一体になれたときが一番気持ちいい
と感じるという。

今は昔と違って、プロでなくてもCDを
出しやすい時代だが、「僕らの良さはCDで
はなく、その場において一緒に共鳴してもら
うというスタイルにあるので、それはしま
せん」という返事だった。

今年の目標は「自分たちの単独コンサ
ートを開く」こと。

「古めかしいワイン・ボトルたちの温かく
ふくよかなハーモニー」は、秋頃には聴け
るであろうか。